

いまこの国には 「新しい旗」が必要です

いまこの国には「新しい旗」が必要です。それは派手に揺れ動く広告の旗ではなく、あくまでも静かに、しかし力強く立ち続ける「内面の旗」。イルサル党が2009年の結党以来追い求めてきたのは、装いを通して経営者の生きざまを社会に伝えること。単なるカッコイイファッションではない。トレンドを追いかけるのでもない。イルサル党が仕立てるのは「経営者の思想」であり「経営者の覚悟」であり、そして未来に向かう「経営者としての信念」なのです。そして今この信念こそが、この国を変える鍵になる時代がやってきました。「装い」は経営者の理念を社会に示す、見えざる言語。経営者であるあなたが、自らの思想を可視化し、社会に強いメッセージを届けていくための「装いのマニフェスト」が必要です。

装いとは単なる見た目の問題ではなく人々の価値観、社会の空気感、ひいては国家の品格そのものを映し出す鏡です。歴史を紐解けば、装いは常に社会の有り様と密接に結びついてきました。たとえば、奈良・平安時代の貴族文化における衣装は、当時の政治制度や階級社会を象徴していました。江戸時代の町人文化では、装いにおける「粹」や「侘び寂び」が広まり、人々の美意識が暮らしに根付いていったことがわかります。また明治維新以降の西洋化に伴い、装いの急速な変化は日本人のアイデンティティに大きな影響を与えました。洋装普及は近代国家への転換を象徴するものであり、装いを変えることが国の方向性そのものを変える力を持っていたことを示しています。装いには、「いま私

たちは何を大切にどんな社会を目指すのか」という問いに対する一つの答えが込められています。現代においては、グローバル化が進む一方で個人の表現の自由も多様化しています。その中で私たちはもう一度、自分たちの足元にある文化そして精神性を見つめ直す時期に来ているのではないかと感じるのです。

「装いから始まる国づくり」とは、単に着物や伝統衣装の復権を目指すものではありません。それは、自分自身や他者を尊重する姿勢、空間にふさわしい振る舞い、季節や場の文脈に配慮する感性を育てることもあります。そうした感性こそが成熟した市民社会を築く鍵になるのです。また学校教育においても、服装の意味や歴史、TPOに応じた装いのあり方を学ぶことは、人格形成において欠かせない学びとなるはずです。国際社会の中で私たちがどのように

イルサル党は 「経営者」こそが この国の希望 だと信じています。

